

## 第1部

### 対談

# 「スポーツの持つ力 —スポーツが復興に果たす役割—

鈴木 寛 (元文部科学副大臣／参議院議員)

大矢根 淳 (専修大学教授／災害社会学)

久木留 毅 (専修大学准教授／社会体育研究所員)

**久木留毅** ありがとうございました。引き続きソチオリンピック、リオデジャネイロオリンピックに向けて、先生のお手伝いしないといけないと思った次第です。続いて、シンポジウム1では、スポーツの持つ力、復興に役立つ力として鈴木先生、人間科学部の大矢根淳先生を交えて話をしたいと思います。今回、鈴木先生はあまりおっしゃらなかったですが、ロンドンオリンピック強化・タスクフォースには、いろんな役割がありました。例えば、日本オリンピック委員会（JOC）、日本スポーツ振興センター、国立スポーツ科学センターなど色々な団体がありますが、鈴木先生がロンドンオリンピック強化・タスクフォースを立ち上げてくれました。いろんな組織を融合させる力になったのは間違いないですし、それを政治家である元文部科学副大臣の鈴木先生にやっていただいたのが力になったのかなと思います。

鈴木先生に関しては説明するまでもないですが、配布した資料の裏にはそれぞれの先生方の略歴が書いてあります。鈴木先生は経済産業省の役人をされたあと慶應義塾大学で教鞭をとっていました。鈴木先生の情報を見ていくと、鈴木先生のルーツですが、先生は神戸のご出身ですが、灘中学、灘高校の出身であることが大きな影響になっているのかなと思いました。慶應義塾大学時代にたくさんの本を書いていらっしゃいますし、副大臣時代も日本の教育を変えるお話をされていますし、「コミュニティ・スクール構想」という大変参考になる本も書いていらっしゃいます。この

教育のルーツが灘中学、灘高校で、知っている人は知っていると思いますが、灘は嘉納治五郎先生と深いつながりがあります。先生には、教育に力を入れるルーツについてお話いただきたいと思います。

**鈴木寛** 嘉納治五郎先生は、柔道をつくった人で、講道館を開いた人です。と同時に、アジア人として初めてのIOCの委員を務めた方です。東京オリンピックの招致は実は今回3回目になるんですが、というのは、1回目は1940年に、嘉納治五郎先生が、アジア初のオリンピックということで招致成功しました。いったんはIOCの方で1940年の東京オリンピックが決まっていたんです。しかし、ご存じのとおり1940年代は戦争が起きて中止となってしまいました。日本体育協会、JOCも嘉納治五郎先生がつくられました。嘉納先生は、もともと今の筑波大学の前身、東京高等師範学校、これは明治時代につくられたものですが、日本中の校長先生を養成する学校です。ここの校長先生を務められていて、その間に第一高等学校・東京大学の前身の校長や熊本大学・第五高等学校の校長など務められると同時に、文部省の局長も兼任されていたそうです。久木留先生も、嘉納治五郎先生以来の兼任ですね（笑）。

少し話が飛びますが、人づくり、教養とスポーツというのは本当に表裏一体です。それを嘉納治五郎先生は感じました。もっと言うと、学習院の教頭時代・嘉納治五郎先生はイギリスに視察に行かれていましたが、イギ

リスのパブリックスクールでは、イギリスはラグビーの発祥の地ですが、フットボールのコートなんかは5面くらいあるのが当たり前なんです。体育施設がものすごく充実しています。そういう意味で、イギリスの紳士は、フットボールやヨット、乗馬、レスリング、ボクシングなど、ほとんど、中学・高校時代からやっている。そういう人たちが社会を担う。人づくりの中のスポーツ、チームがあるということ、を、若い頃に見て日本に導入されました。

そういう中で私は育ちました。私の6年間は、中学校1年生から高校1年まで、柔道が必修でした。週1の柔道が必修で、さらに体育が週3回ありました。ほぼ毎日体育があるんですね。これもパブリックスクールになったものです。それで、とくにサッカーなどのチームゲームを中心にやっていきました。これも嘉納治五郎先生のお考えです。あるいは、神戸で初めてプールができたのも、灘高校なんです。そういう学校です。スポーツ、柔道が盛んでした。私もおかげさまで、神戸市のリーグで1部優勝させていただいたことがあります。相手校には後のJリーガーもいるなか、心技体ということの大切さ、全力で若い頃に打ち込む大切さ、先ほどもありましたが、夢を追うこと、努力をすること、頑張ることの大切さ、頑張ってきた友達こそ本当の仲間、ということを教えていただいた気がします。

**久木留毅** ありがとうございます。オリンピック憲章がキーワードとして出てきますが、クーベルタン男爵が作ったものですが、嘉納治五

久木留 毅



大矢根 淳



鈴木 寛



郎先生の教えとまさに重なるところがあると思います。今、鈴木先生は神戸を中心にシックス（SCIX:NPO 法人 Sports Community & Intelligence Complex）というNPOを立ち上げています。これについて後ほどお話しますが、これに関わった平尾誠二さん、ラグビーですが、大矢根先生もラグビーをやっていたらしゃって、今回、なぜ鈴木先生と大矢根先生のコラボレーションを考えたのかというところも一つです。また、大矢根先生は社会学を専門にされています。目に見えない社会現象の実態や、現象の起こる原因に関するメカニズムを解明するための学問が社会学です。そこで、スポーツと震災との関係、何ができるかという事を考えた時に、大矢根先生に、ぜひ社会学の観点から、見えないものを見る力についてお話しできたいと思います。

**大矢根淳** むちゃぶりで（笑）。2007年、北京オリンピックの丸1年前に、各競技団体を集めてJOCのカンファレンス（テクニカルフォーラム）が実施されました。ちょうど専修大学で北京の街の調査・研究をやっていた時です。「北京の街ってどういふところなんだろう」ということを知りたいということで、2007年に久木留先生と一緒に歩きました。街を歩く中で、五感で感じることを全てメモにとりました。昔は今みたいにICレコーダーとかなくて、全部メモにとっていました。つまり、自分が五感で感じたことを自分の言葉で、社会学の専門の言葉を交えながら表現して情報を蓄積していきました。そういうことをやっていま

した。

目の前にあるのだけと見えていないものというのが、実は次から次へと見えてきます。北京オリンピックのために、築400年から800年もある伝統のある古い民家を全部壊し始めました。あっという間に壊されて、あっという間に住んでいる人たちは追い立てられてしまった。日本では決して起こらないですね。だけど、そういうことがあの場所では起こっていた。それを2003年からずっと記録にとってきました。そのことを久木留先生や大学の先生方に見ていただいた。そこで何が見えてくるのか。

オリンピックに参加して競技をする、その結果、そこでは国際交流が深められる、そこでできれば、地元地域との交流を盛り込んでいただいて、地元の生活を理解していくようにしていただきたい、ということでした。アウェイで戦うためにはそういう地元の状況理解が必要なのではないか、ということです。私が一人で見てわからないことが、選手やコーチの人と一緒にいて見えてくるものがあります。見えないもの、見れば見るほど読めないものも見えてくることもあります。

**久木留毅** ありがとうございます。このシンポジウムで大事なことは、色々なことを学生の皆さんに提供したいというのがあります。2011年3月11日には、東日本大震災がありました。その前には、1995年阪神淡路大震災がありました。鈴木先生のシックスの話をしていましたが、実はここにスポーツが震災に大き

く関わった第一歩があったのではないかと思いますがいかがでしょうか。

**鈴木寛** そう思います。というのは、今回の東日本大震災も阪神淡路大震災もそうなんですが、あの様な災害の時には一番元気になってもらえるのが、スポーツなんですね。また、アスリートの皆さんの存在ですね。サッカーの川淵三郎さんとJOCの竹田会長とお話をし、とにかくアスリートの皆さんに現地に入ってもらおうということになり、現地に行っていたきました。

その現地での反応が、阪神淡路大震災の時も同じ思いをしましたが、阪神タイガース、オリックスを始めプロアマ問わず、選手がふれあい、「がんばろう神戸」というゼッケンをつけて試合をしてくれました。この時私達は、スポーツの持っている力、人間の持っているもの、魂を鼓舞する力は素晴らしいな、と思いました。こういったものをあの時に垣間みしました。

東日本大震災で申し上げると、我々としては学校授業を速やかに再開するという課題がありました。同時に、部活動をどうするか。部活は難しいと思っていたのですが、むしろがんばって部活を再開することで子供に元気になってもらう、そして、子供の笑顔を守ると地域のお父さんお母さん、おじいさんおばあさんに、それをみる地域の方々に笑顔が伝播していくんですね。そういうことをみさせていただきスポーツの素晴らしさを知りました。また、日本代表選手の皆さんの素晴らしいの



は、本当に苦しい4年間、8年を送られて、そこに耐えぬいてきた体験してきたことについても素晴らしさを感じました。

**久木留毅** ありがとうございます。これについては、後ほど3人の選手にもお話をいただければと思います。大矢根先生達は、阪神淡路大震災の際の活動が今も続いているそうですね。

**大矢根淳** 1995年の震災があった時に大学院に在籍して、あの日に国際学術会議で大阪・神戸にいた自分たちの先生が音信不通だったんです。真っ白になりました。全員無事だったことはわかりましたが……。それから、神戸の復旧。神戸は1995年ですが、雲仙普賢岳の噴火が1991年にありました。長崎は20年たっても、阪神は18年目になっても、まだ復興は継続しています。そのことを言わせていただきたいと思います。皆さんは東日本大震災の復興と聞いてどういうものを思い浮かべるでしょうか。阪神の復興ではどうでしょうか。それは例えば、街並みがきれいになってマンションが建って、ということでしょうか。

もちろん、そういうものもありますが、東日本の復興というと港が整備されて高台が作られて、というイメージがあります。僕自身はこういう勉強をしてきて、そして今でも復興に関わっているので、それはほんの一部の現象なのではないかと思っています。一番重要なのは生活再建です。それにどのくらいの時間がかかるか、というと、僕自身は30年かかると思います。二世代目の再生が順調に進みはじめたと感じたときに、努力が報われるのではないかと思います。そういう風に、復興っていうものを捉えてほしいと思います。

**久木留毅** ありがとうございます。私達は、復興というと橋が戻ったり道路が整備されたり、マンションが戻ったりというイメージがあると思います。私も最初はそう思いました。両先生のお話を頭の中でつなげていった時に、しかし、復興というのは、まさに鈴木先生が取り組んでこられたことと思いました。

**鈴木寛** 日本というのは、ハードを作ることを中心として戦後60年やってきたわけです。必要なハードは大事です。しかし一番大事な

ことは人であり、ライフなんです。私はライフと呼んでいますが、それは3つの意味に訳せます。命、人生、それと生活。ライフっていうのはもっと大事にされる価値観であり、変換が求められていると思います。となれば、予算の配分、ウェイト付けもハードウェアから重点を移していくが必要になります。私は11年申し上げ続けています。

国土交通省の予算を、文部科学省の予算が上回ったのです。そういう中で、スポーツ予算も過去最高になっています。我々は何のために社会を作っているのか、それぞれの人のライフを、命を、守ることだし、なぜ文化が必要かといえば、豊かな人生を送るためです。当然それを支えるための生活があります。そうした豊かなライフのために、私たちの社会の変換が求められており、今回のテーマは社会改革ですけど、そういうことなんじゃないかなと思います。

**久木留毅** ありがとうございます。大矢根先生、「山、海へ行く」の説明をしてもらっているのですか？

**大矢根 淳** 学生のころ、本で読んで勉強したのですが、神戸は六甲の山を削って住宅地にして、土砂を海に運んで埋立地にして、そこを工業地帯にしました。これが「山、海に行く」で、当時、自治体経営の一つのお手本となりました。そのツケがきたのが、阪神の震災でした。売れる住宅地、工業地帯を作ってお金をまわす。そういう経済、社会にしてよかったのだろうか、と徹底的に反省されたのが阪神の震災でした。

**久木留 毅** 鈴木先生、ライフという価値観を考えたとき、スポーツの関わりがかなり大きくなるのではないのでしょうか。

**鈴木 寛** さきほどの阪神の話にもつながりますが、阪神淡路大震災以降に出てきた大事なキーワードがあります。ボランティアです。阪神淡路大震災以前は、ボランティアというのはほとんど日本ではありませんでした。しかし、阪神淡路大震災の時に、災害ボランティアがものすごい活躍してくださって、私の父も被災しましたが、ボランティアの方々に励まされました。そこに、心がこもっていた。私は1997年に「ボランタリー経済の誕生」という本を共著で書いていますが、ボランティアというのは社会改革においてものすごく大事なキーワードだと思います。ボランティアってどういうことかということ、もともと志願兵という意味で、志願するということなんですね。誰かが、上から、先生から指示されることを待って、やれば給がもらえる、というシステムがありますが、高度経済成長はまさにそういう構造を持っていました。こういうことをやれば給がもらえる、やらないと鞭をもらう、給と鞭によって社会が成り立っていた。しかし、そこに限界が来ているんですね。人生の幸せを考えてみてください。誰かにやらされている人生と、自発的なライフ。どちらの方がいいか。当然、命令されるライフではなく、自ら進んでやるという人生の方が楽しいと思います。その時、御託を並べるのもいいですが、スポーツは究極の自発です。コーチからアドバイスなどはありませんが、自分で考えて自発して、レスリングならタックルをしているわけだし、シュートなんか後ろから言われてシュートしているわけではない。まさに自分が考えて自分たちが考えて現場で自分たちが勝つ、という意識のもと毎秒毎秒やっているんですね。

今の教育の最大の問題は何か、受け身であることです。求められるのは脱受け身人間ということですね。スポーツというのはまさに脱受け身ですね。受け身ではできないですから。そういう意味で、脱受け身人間というのは教育上大事です。

スポーツは義務でやっているわけではないので、スポーツクラブ、アクティビティを支えるのは、皆ある種のボランティアリズムですよ。もちろん、それで給料をもらうとかありますが、じゃあ給料をもらわないからシュートを打たないか、給料分しか働かないということはない。プロだろうがアマチュアだろうが、持てる全ての力を使って最大限尽くすということ。スポーツアクティビティ自体の持っているものは、給と鞭を超えた、近代国民国家システムですね。あるいは近代というものの特徴は給と鞭によって我慢が成り立っているんだけど、コミュニケーションやコラボレーションという文化が大事にされる時代に、僕は近代といっているんですが、そういう時代を卒業するのが、次の時代になっていくということですよ。

次の時代のイメージ像を、スポーツが全て表現してくれています。そういう意味でも、新しい時代を作ることに、スポーツを慣れ親しんだ人たちが新しいリーダーにもなれるし、新しいスポーツを支えるコミュニティというのが、22世紀を先取りするものだと思います。というスポーツの可能性だと思います。

**久木留 毅** スポーツとボランティアというのは相通ずるものがあります。私は先生のご友人の金子郁容さんの「ボランティアー もう一つの情報社会ー」という本を読み、まさにスポーツとは全く関係ないものと思われていたボランティアがものすごく共通するものがあって、自発的、というものであったり、ボランティアをやるときの覚悟を学びました。大矢根先生は被災地に入られて、学生とボランティア活動をしていく中で、「自分は本当にボランティアをしていいのだろうか」ということも考えたりすることがあるのではないですか。

**大矢根 淳** とくに今回の震災は、人が圧倒的に足りませんでした。阪神をきっかけにボランティアや、いろんな企業・NPOが立ち上げられていて、それらが駆けつけましたが、それでも人が足りなかった。その中でも、少

しずつ数が集まって、それが石巻専修大学を一つの拠点として活動を開始しました。これが今回、「石巻の奇跡」と言われたボランティア活動です。

ボランティアが何をやっていたかということ、例えば、がれきの撤去です。家に流れ込んだがれきの撤去をするわけですが、非常に疲れます。ぐったりして夕方の反省会に戻ると愚痴も出ますが、励ましも出ます。実は、その反省会が非常に重要で、そこでこれまでの防災について行政が把握していないたくさんの方が、ボランティアの活動から見えてきたのです。明日はこれをやらなければならない。彼らは新しい発見をしたという自覚はありませんが、苦しみながらも見出しってきます。若いボランティアの人たちが現実を次々と発見していました。これが「見えないものを見る力」です。いいことも悪いことも、ボランティアによって次々と発見されたのが今回の震災だったと思います。とくに最初の2、3カ月はそれが顕著でした。

**久木留 毅** ありがとうございます。東日本大震災ですが、鈴木先生はマルチサポート事業に関して、日本選手団を送り出すに際し、今回は特別なものがあるとおっしゃっていました。スポーツの政策はもちろんです。鈴木先生が立ち上げられた支援ポータルサイトについてもご紹介していただいていいのでしょうか。

**鈴木 寛** 先ほど部活動をいかに早く立ち上げるか、というお話をしたんですが、野球部のミットもバットも流されている、バレー部やヨット部などもそうです。まずはアスリートの皆さんに入ってもらって励ましてもらったんですが、話題にあがったポータルサイトというのは、文部科学省のウェブにポータルサイトがあって、被災地の教育委員会、学校、団体の「こういうものが欲しい」という要望に対し、全国の団体がこういうものなら差し上げられるというやりとりを文部科学省のサイトでやれるようにした。そうしましたところ、2200件がまとまって、欲しいものとあがるものが合致しました。通常、欲しいものと贈りたいものはミスマッチしてしまうんですが、それで確認しないと倉庫にしまわれてそのままになってしまうのですが、それがポータルサイトです。その、7割か8割が部活動なんです。

文部科学省にも予算がありますが、校舎を



立て直すとか、教員を追加するとか。授業に関連したところを優先せざるを得ない。どうしても、全員の優先順位だと部活は最後になってしまう。税金では優先順位は最後になってしまうけど、実際中学生や高校生ってなんで学校に行っているかという、ほとんど、部活をやりに行っていたんですね。とくに三陸沖の中学生は 98 パーセントの男子が部活に入っていました。

岩手県立宮古高校のヨット部は全国からヨットが集まった。滋賀県の膳所高校は買い換えただけの新しいヨットをあげて、自分たちは古いヨットを使い続けました。そして、その贈られたヨットに乗って、宮古高校ヨット部は東北大会で優勝、インターハイも優勝します。ものを通じて、全国の心をそれぞれの部活に届けられた、そんなエピソードがあります。新しい公共のこころみでした。部活って素晴らしい、そしてそれをお互いに共有することは素晴らしいと思いました。

**久木留毅** 東京・神奈川も練習できないところがありました。施設は被災していないのですが、練習をすることができませんでした。大会の期日は迫っています。そこで練習不足を解消するために、色々なところに行っていました。

**鈴木寛** 思い出したのが、ロンドンオリンピックに向けた大事な時期に入っていましたよね。タスクフォースで実現計画があって、体操とかは充実した施設がないと危ないんですね。平均台など。一つ一つきめ細かく、メリハリをつけて練習の安全を確保することもやっていましたね。

**久木留毅** そういった意味で、震災でスポーツが果たした役割、可能性が見えてきたと思います。

**大矢根淳** 釜石と神戸製鋼の例もありますが、僕がスポーツと被災というキーワードで考える時、イチロー選手のことが一番思い出されます。神戸で彼は被災したわけですが、開幕できるのか、厳しい状況が続いていて、今も神戸新聞のサイトでもいつでも読めるようになっていると思いますが、以下のことがあります。毎年彼は、開幕の2月前まで自主トレをやっているんですが、神戸で始動するんですね。彼は、拠点はアメリカですが、神

戸に行くとは言わず神戸に帰る、と言うんですね。自分のアイデンティティを確認するためと明言しています。イチローにとって神戸は非常に重要なスタート地点なんですね。神戸の人たちは毎年イチローが来てくれることで、自分たちは忘れられていないのだと実感できるのです。絶対忘れない。被災地でもっとも恐れられているのは、復興宣言をされて5年経って復興公共事業が終わると、そうすると、みんな忘れてしまうことなんです。2008年に岩手・宮城内陸地震がありましたが、もう、復興宣言されるとみんな帰ってしまう。その辛さ虚しさをこの被災地の人々は抱えているから、自らも被災しているが今回は沿岸部に援助に出かけているのです。自分たちが忘れられたくないから、自分たちが沿岸へかけつける。継続という言葉ありましたが、忘れないということも大切ですね。

**鈴木寛** まさに、それが総合教育なんですね。永遠のゆがみがありまして、教育はいつたん始まると100年、200年、変わらない。それで新しいコンセプトで総合高等教育協会をつくりました。これは三県のエデュケーションの大学の先生たちで作りました。まさに日本の国というのは工業社会型のマニュアルを覚えて、正確に高速に再現する指示通り。この教育で世界一になって、世界の工業立国になったのですが、しかしそこから卒業しなくてはいいないわけですね。実は釜石の奇跡という、群馬大学の片田敏孝先生（群馬大学大学教授・防災研究科）が、ずっと10年間、岩手県を中心に行っていた防災訓練が非常に素晴らしいものです。マニュアルに頼らない、ミスを恐れず最善を尽くす、そして、指示を待たず率先的避難者になる。という教育を10年やってきた結果、岩手県の三陸沖では自宅にいらっしゃった方や小学生を迎えに行った方は大変残念ながら犠牲になられた方はいらっしゃいました。しかし、小学校・中学校では一人も命が失われていない。それはまさに、教育だったわけで、30年の堤防よりも、ここ10年の防災教育が子供たち若者たちの判断力、コミュニケーション能力を高めて、自分たちで判断してちゃんと逃げたわけですね。これを、防災教育だけに求めるのはもったいない。我々、毎日毎年、いろんなリスクに見舞われると思います。経済的なリスク、新型インフルエンザのパンデミックのようなリスクだったりします。いつか、津波など大変なり

スクを背負う時があるのかもしれない。その時にどうやって生き残っていくか。生き抜いていくかということを経験と社会に求められているし、これから世界の人たちもそうです。リスクっていうのは想定外のことをリスクというわけで、そういった時にまさに、20世紀の東北で行われていた教育に戻すのではなくて、21世紀を先取りした教育を東北から始める、ということです。専修大学は、江戸幕藩体制が終わった頃、近代教育を先取りして教育を始め、近代ができあがったわけです。まさに近代を卒業する時代の若者たちを養成する教育。自発だとかコラボレーションだとか。そういうことがキーワードになります。まさに、想像できる公共授業をエンドレスに始めていこうとしています。

**大矢根淳** 震災と常にセットになっている言葉があります。「つなみでんこ」。津波がくと思ったら率先して避難しろという教えです。小学生・中学生たちが教育の中できちんと防災訓練を受けていた。実は「つなみでんこ」にはそれを越える哲学があるんです。実際避難すると自責の念にかられるんです。自分は避難した、助かったけど、目の前で流されている人がいた。ムラの教えであるところの「つなみでんこ」を守って生き抜いた君たちには、喪われたものをきちんと弔い、この集落の復興に向けて頑張りたい、生き抜いてくれてありがとう、という生存の自責の念を慰める哲学なのです。

**久木留毅** お二人の話を聞いていると、スポーツと相通じるものがあるのではないかと思います。第1部の時間がせまってきたので、ずっと続いていく教育、ずっと寄り添い続けるプロセスの必要性ということで、震災にスポーツとしても寄り添い続けていかないと。1部の最後に、先生方から「寄り添い続けるスポーツ」という点から一言ずつコメントをいただきたいと思います。

**大矢根淳** 言いつらい部分がありますが、あえて。社会学は多様な視点で現象をとらえる学問ですので、その視点からお話します。被災地に多くの人が行きました、スポーツ選手も行きました。そういう方々が自分たちのブログに子供たちの笑顔とか、はつらつとした姿を載せています。それで、状況も確かに変わっているのですが、それをあえて多角的な視点



から紹介したいのです。子供は疲れ切っています。頼むから来なくてくれ、というのもあるんです。月曜日になるとぐったりして授業にならない。我々はその現場にいて、元気のない子供たちに聞くと、「楽しかったけど」と言って下を向いている。嫌なことじゃないんだけど、今はそういう気持ちということもある。でも、そういう現実もあるということを考えながら、これから10年先20年先、どう友好的な状況を作れるかということを考え続けることが大事。やはり考え続けることです。考え続けるというのがアスリート、芸能人、我々もそうですが、大事なことです。

**鈴木寛** 同じ事ですが、対話ですね。心を通い続ける。その中で、そっと見守ることも大事だし、アスリートってものすごい感性があります。凡人では気づかないものを瞬時に立体的に感じる力があって、心を配る感じをしていただきたいことと、先ほどともつながりますが、今、日本の社会は、責任は果たさないといけないのですが、「責任」というものに過剰反応するようになっていて、責任を果たすことを追及されて、責任の圧力につぶされてしまいそうです。そうすると我々は責任が

ある役割を担わなくなってしまうという悪循環になってしまいます。ミスを恐れず最善を尽くすことが重要で、責任者はミスしてはいけない、でもミスしないようにするために、何もしないようになっています。それが今の日本の悪循環の始まりで、何にオネストでないといけないかというと、最善を尽くすということについて真剣でなければならない。社会から忘れられているのですが、アスリートは意思の連続。最善を尽くしているのがスポーツたるゆえん。バドミントンではこの前、ニュースになりましたが、あれは最善を尽くしていないわけで、その当たり前の話なんだけど、今の日本がだんだん変な状態になってきている中で、みんなが最善を尽くす、指示を待たないということが大事。指示を待ってミスをしないで待っているというのは楽なんです。日本の若者がそうなりつつある中で、若者が最善を尽くし自発している存在がアスリートで、皆さんが世界で活躍してくれているのが、日本の受け身になりがちな若者に対してものすごくいいお手本、生き様をみせてくれている。アクティブライフになっている。これからも、今まで通り頑張っていたいただければと思っています。

**久木留毅** ありがとうございました。大矢根先生から震災におけるスポーツの役割を社会学の観点からお話いただきました。また鈴木先生からは「ミスを恐れず最善を尽くす」という決意で、スポーツが震災から復興において色々なかたちで力を与えていく可能性があるというお話をいただきました。第1部はスポーツの持つ力、スポーツが復興に果たす役割ということで鈴木先生、大矢根先生にお越しいただきいろんな話をさせていただきました。ありがとうございました。